慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	C・ホスキンズ著 土屋哲訳 『コンゴ独立史』 (現代史・戦後篇・17)
Sub Title	Catherine Hoskyns : The congo since independence : January 1960-December 1961
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1967
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.40, No.6 (1967. 6) ,p.113- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19670615-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

C・ホスキンズ著　土屋哲訳

『コンゴ独立史』（現代史・戦後篇・17）

一　本書は、Catherine Hoskyns, *The Congo Since Independence: January 1960—December 1961*, Oxford University Press, London, 1965 の全訳である。

著者ホスキンズ女史は、オックスフォード大学卒業後一時ジャーナリストとして活動し、さらに王立国際問題研究所にも在籍したことのある、イギリスの有能なアフリカ研究者である。ことにコンゴ問題についての研究は精力的と評すべく、そのためにコンゴおよびその他のアフリカ各地域はもちろん、ベルギー、アメリカへも踏査の足をのばして、その直接経験を尨大な資料によつて検証した結果を、五〇〇頁余にまとめあげたのが、本書なのである。

この研究成果を公刊するに先だつて、彼女自身、イギリスの権威あるアフリカ問題専門誌 The Journal of Modern African Studies, (Vol.1, No. 3, Sept. 1963) に "Sources for a Study of the Congo Since Independence" と題する Review Article を寄稿し、そのなかで独立以後のコンゴに関する研究資料四四点を紹介しているが、本書は、まさしくそのリストに、もつとも重要な一点をつけくわえたものといつて差しつかえないであろう。

コンゴといえば、一九六〇年にベルギーから独立し、ただちに暴動が発生、その後ベルギー軍の介入、内部分裂、ルムンバの劇的な死、分裂各派に対する大国のリモート・コントロールおよび国連の介入とつづいて世界の耳目を集め、「アフリカの年」といわれた同年から一九六一年にかけて、単にアフリカのみならず世界の焦点を形成した国である。この間、我国においても連日新聞紙上にその動向が報道され、また総合雑誌にも多くの解説、評論が掲載されたが、それらはかならずしもバランスのとれた十分な事実認識を土台としたものとはいえなかつたであろう。その後、学術論文の体裁をとつたものも二、三発表されたが、その内容は、研究の成果と呼ぶにはいささか拙速でありすぎるという感じをまぬがれないようである。したがつて、これまでのところコンゴに関する邦語の文献としてわれわれが依拠しうるものといえば、わずかにルムンバ自身の論述『息子よ未来は美しい——統一コンゴへの思想』（榊利夫編訳、理論社刊、一九六一年）、『祖国は明日ほほえむ——夜明け前の信条』（中山毅訳、理論社刊、一九六四年）の二冊を数えるのみであつたといつて過言ではない。しかし、これとても渦中の人物の著書、ないしはその演説の記録であり、それだけではコンゴについての客観的な認識はえられないであろう。

そうした面から考えれば、ここに『コンゴ独立史』が邦訳出版された意義は極めて深いといわなければならない。本書によつて、日

本語にたよる読者は、はじめて本格的なコンゴ問題の研究に接することができるのであり、また、キメのこまかいその分析を通じて著者とともにコンゴ問題の核心にせまることが可能となるのである。

ここで本書の狙い、および構成を見てみよう。本書のカバーする範囲は、時間的には一九六〇年一月から一九六一年十二月までという比較的短い期間であり、その主たる狙いは「コンゴ危機の内外両面を述べ、各段階において、コンゴ内部の出来事に、どのような形で、コンゴ外部の出来事が反応したのか、あるいはその逆を、明らかにすること」（一頁上段）である。そうした狙いをもつて構成された本書は、以下のごとき、一三の部分に分かれている。

まえがき
一、一九六〇年一月
二、過渡期
三、独立とその後
四、国際舞台へ
五、カタンガ問題
六、憲政上の危機
七、一九六〇年の年の瀬
八、ルムンバの死
九、合法性の復活
一〇、カタンガの動向
一一、十二月危機
一二、むすび

このほか、付録Ⅰとしてルムンバ内閣（一九六〇年六月）およびアドーラ内閣（一九六一年八月）の閣僚一覧表が、付録Ⅱとして当該期間中の「コンゴに関する国連の決議」が、載せられている。

二　つぎに本書の具体的内容であるが、ここで著者の議論を跡づけ、わずか数頁に要約、紹介しようとするのは、無暴であろう。なぜなら本書の価値は、よつてたつその観点のユニークさやフレーム・ワークの新しさにあるのではなく、まえにも述べたように、あくまでもその分析のキメのこまかさにあるからであり、したがつて強いてこれを圧縮することは、かえつてその長所を殺すことになりかねないからである。

そうした配慮を承認していただくとして、ここでは、特に示唆的と思われる二、三の指摘を挙げるにとどめたい。

まずその第一は、ルムンバの死とコンゴ動乱の関係であるが、これに関連して著者は、「アフリカ・ナショナリスト系の新聞や多くの個々のアフリカ人が表明した論評をまとめてみると、まず第一に、ルムンバ個人の細かい性格なり行為は全く捨象されてしまつて、今やルムンバは、純粋に、単純にアフリカの民族独立闘争の象徴として受けとめられていたこと、第二に、ヨーロッパ勢力の政府が、いかに外交的な詭弁を弄しようとも、大多数のアフリカ人たちは、心情の奥底では、ルムンバの死の責任の大半は、ヨーロッパ勢力と国連にあるのだと確信していたという二つの点にしぼられる」（二五四頁下段）と述べている。しかし、こうした受けとめ方は、著者のいう「アフリカ・ナショナリスト」だけでなく、我国にも非常

に多いのではなかろうか。

こうした受けとめ方から、「ベルギー帝国主義」の弾圧、その手先ども（チョンベ、モブツ、カロンジ、カサブブ等）の裏切り行為、さらにはまた、ハマーショルド国連事務総長の卑劣な行為、というエモーショナルな評価が、ただちに生みだされてくるのである。たしかに、部分的にはそうした評価も成立するであろうし、またナショナリスティクなバイアスをもつたアフリカ人ならば、そうした評価に片寄るのもうなづけないことはない。しかし、我国の観察者がそうした単純な図式にとらわれては、局外者にしてはじめてもちうる客観的な認識に接近することが、不可能になつてしまう。アフリカ・ナショナリズムが現代国際政治における一つの正当な潮流であるがために、われわれがとかくとらわれがちな安易な図式を、本書の分析は指摘し、事実はそれ程単純でないことを示唆してくれるのである。

以上の点にも関連しているのであるが、一九六〇年七月に行われた「カタンガ州の分離独立宣言」、およびベルギーがそれを支持したことについて、著者は、単に自国の経済的利益をベルギーが擁護しようとしたとみる一般的な説明だけに終始せず、「確かに財政的な配慮が重要な役割を演じたことは認めるが、その反面、ベルギー人があのような行動をとつた理由の一つに、ベルギー人がアフリカおよび世界の新しい趨勢を理解できなかつたことと、少くとも経済的関心だけでなく、感情的な配慮から、カタンガを支持した点があつたことは、ほとんど疑う余地がないようだ」（傍点・小田――三七六頁上段～下段）とし、さらにその「感情的な配慮」については、「第一に、事件についてのコンゴ側の説明よりも、同情的に聞き入れられているという認識、第二に、西欧側同盟国の中にも、ベルギーの立場を擁護するよりは、アジア・アフリカ側の意見に合せることの方が、はるかに大切だと思つている国があるという認識は、ベルギーにとつて非常にショックであつたし、国連およびカタンガに対するベルギーの態度を決定的にしたものは、財政的配慮というよりはむしろ、恐らくこのショックのためであつたといえるだろう」（三七六頁下段～三七七頁上段）と述べている。こうした指摘が正しいか否かは、にわかに断じえないとしても、その推論が、能うかぎり客観的であろうとする姿勢、およびキメのこまかい分析があつてはじめてたてられうるものであることは、たしかである。

このほか、コンゴ動乱と国際関係とが相互にあたえたイムパクトについての分析も興味をひく。これについては各章の詳細な叙述のほか、「むすび」の部分に、手ぎわよく整理された「評価」がのせられている。これによつて、読者は、コンゴのように独立の条件がととのつておらず（これは全くベルギーの無責任な植民地政策のためであるが）しかも分裂的傾向の強い地域に、突然独立があたえられた場合、それが外部のイムパクトによつてどのように揺れ動くか、また、ひとたび混乱と分裂が生じた場合、国内的諸事件が、思いもかけぬほど強い国際的意味を賦与され、もはや国内政治の論理では解決しえなくなるその程度がいかにたかいかを、改めて認識するであろう。

三　著者は、本書の冒頭で、「一九六〇年、一九六一年に、コンゴで発生した出来事について、決定的なことを記述するのは、明らかに時期尚早である。……現段階では、提起される疑問に対する解答の多くは、あくまで推測の域を出ないし、せいぜい試験的な結論を出せるにすぎないのだ」（一頁上段）と述べているが、たとえ推論にせよ、試験的な結論にせよ、現段階で利用可能な尨大な資料を駆使して生みだしたこの業績は、たかく評価されなければならない。

また、翻訳も全体として平易な日本語であつて、この業績を広く我国の読者に紹介するのに、不自由を感じさせない。もつとも、やや直訳に過ぎて、読む場合スムースに目が走らない部分もないではない。たとえば、「コンゴ政府に、その株式の、あるいは歳入の百分比を納入すること」（一三頁上段）とあるのは、「……歳入の一定のパーセンテージを……」とした方がいいように思うし、「その時以来コンゴ側は……ベルギー側の中立化に援助してくれる第三勢力を」（八一頁上段）は、「ベルギー側を中立化するのに手をかしてくれる第三勢力を」とした方が、日本語として通りがいいであろう。このほか、「事務局ではその高率を占める職員が、……基本的には西欧的な見方をしていた」（九〇頁下段）は、「……その大部分の職員が」としてしまつていいような気がする。

また、「ユニオン・ミニエール・ドゥ・オー・カタンガ」が「ユニオン・…ミエール・ドゥ・オー・カタンガ」（一三頁下段）となつていたり、「ルムンバ派から推薦された候補者は全部当選したのだ。即ち、議長選挙では……」（六二頁下段）とあるべき部分が、二行にわたつて活字の混乱をみせているのも、気にならないでもない。

しかし、なにぶんにも、原著にして五〇〇頁を越す大著である。「その象徴（標識）であるカタツムリのように……」（二〇頁下段）が改行になつていないという小瑕瑾も含めて、この程度の誤植は、ない方が不思議であろう。

数ある邦訳書のなかには、訳者の良心と責任感に疑問をいだかせるようなものも散見されるが、本書はそうした類のものとは無縁な訳業として、原著ともどもたかく評価されるべきである。（昭和四十一年十月、みすず書房、四一六頁、一八〇〇円）

（一九六七年三月三十日）（小田　英郎）

Morimichi Watanabe

The Political Ideas of Nicholas of Cusa with Special Reference to his *De concordantia catholica*

1963. Genève. 214 pp.

渡辺守道著

『ニコラウス・クザーヌスの政治思想』

—「普遍的一致」に関連して—

近年、ルネサンス期の思想家ニコラス・クザーヌスに関する研究